

欧州馬術レポート

週刊 Gallop 2020 年 6 月号掲載



日本中央競馬会所属

◆佐々紫苑

(さっさ・しおん)

1995年東京都生まれ。早稲田大学卒。2012年全日本ジュニアライダー総合馬術選手権優勝。15、16年全日本ヤングライダー総合馬術選手権連覇。20年4月にJRA日本中央競馬会入会。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

馬心伝心 —奮闘記part II—

佐々紫苑

Shion Sassa



学生時代、総合馬術のクロスカントリーで、ヘルメットにヘッドカメラを付けて走行したことがあります。乗り手目線の映像は臨場感があふれ、動画を見ている人にもその迫力が十分伝わる映像になりました。

昨年、ロッテルダムで行われた障害馬術ヨーロッパ選手権で屋外競技場に設置してあったのは、馬場の上を横切るように張られた太いワイヤと、そこを移動して撮影をするカメラです。カメラ

の影で馬を驚かせてしまうことがないように、馬の動きに合わせて絶妙なタイミングで動き回るカメラの存在を馬たちは気にする様子もありませんでした。カメラがワイヤを移動するザーッという音も、走行に集中している馬たちは気にならないようでした。

この撮影方法、クロスカントリーのように広いフィールドを同時に複数頭が走る（前の走者のゴールを待たず、時間差でスタートするため）競技の撮影は難しいかもしれません。今人気のドローンでの撮影も、落下する可能性を考慮して、実用には時間がかかりそうです。競技



ロッテルダムにて、人馬の頭上を通過するワイヤカメラ（本人提供）

中の映像には、障害物にカメラを取り付け、下から見上げるような角度で撮るあおりカメラもありますが、全長約6m、分速570回転、40〜45個の障害を越えて疾走するクロスカントリー競技では、スタートからゴールまで全ての走行を追うのは大変な作業です。応援する人馬の走行は全て見ていたい…、こんなわがままにに応じてくれる、迫力のある映像がいつか撮れるようになればいいですね。（ヘッドカメラの映像は、「佐々紫苑」で検索してみてくださいね！）

Let's enjoy Dressage

高田茉莉亜

Maria Takada



アイリッシュアラン乗馬学校所属

◆高田茉莉亜

(たかだ・まりあ)

1994年東京都生まれ。慶應義塾大学卒。2010、11年に全日本ジュニアライダー馬場馬術選手権連覇。16年の全日本ヤングライダー馬場馬術選手権で史上初の4連覇を達成した。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

先日、ヨーロッパの馬場馬術情報サイト（Eurodressage）で気になる記事を発見しました。タイトルは「Thoroughbreds in Dressage Competition」。直訳すると「馬場馬術の大会におけるサラブレッド」というものです。

現在の馬場馬術界では、主にウォームブラッド種（温血種）が活躍しています。地名由来の名前がついているハノーファー種、ウェストファーレン種、ダッチウォームブラッド種といった品種も、全てウォームブラッド種に属しており、国際大会やオリンピックでサラブレッドを目にすることはありません。

ところがその記事によると、1960年代までの馬場馬術界ではサラブレッドが中心となって活躍していたというので驚きました。ちなみに気になって調べてみると、私の愛馬の6世代前もサラブレッドでした。

馬術競技馬の売買が盛んになり、若馬の大会がスタート。若いうちから馬術的調教をしやすく、ダイナミックな脚さばきができるウォームブラッド種の人気徐徐に上がり、いつの間にかトレンドに。1980年代後半にはサラブレッドが馬場馬術界から姿を消したそうです。

とはいえ、サラブレッドが馬場馬術の華麗なステップを踏んでいたことは事実。競馬界を引退し、馬術界で活躍する馬がこれからも増えてくれるといいですね！



現在内国産選手権4連覇中の引退競走馬バリュニコフ（©日本馬術連盟）